

第17期第3回青森県生涯学習審議会 会議概要

日時	令和7年5月26日（月）10：00～12：00
場所	青森県庁北棟 709会議室
出席者	▼委員 千葉 栄美 小野 淳美 小寺 将太 岩本 ヤヨエ 米沢 美幸 小笠原 秀樹 工藤 貴子 越村 康英 山崎 結子 ▼事務局 清川 喜之（生涯学習課長） 西塚 努（生涯学習課学校地域連携推進監・課長代理） 三上 崇裕（生涯学習課企画振興グループマネージャー） 他4名
内容	1 開会 2 案件 （1）令和6年度生涯学習・社会教育総合調査研究について （2）実地調査について （3）その他 3 閉会
配付資料	1 第3回青森県生涯学習審議会次第 2 第17期青森県生涯学習審議会委員名簿 3 第3回青森県生涯学習審議会座席図 4 【資料1－1】令和6年度生涯学習・社会教育総合調査研究の概要 5 【資料1－2】生涯学習・社会教育総合調査研究の活用実績 6 【資料2－1】第1回及び第2回審議会の意見整理 7 【資料2－2】第17期青森県生涯学習審議会における実地調査について 8 【資料2－3】実地調査の候補先一覧 9 【資料2－4】実地調査の候補先について 10 【資料2－5】第17期青森県生涯学習審議会における実地調査・調査シート（案） 11 【参考1】第17期青森県生涯学習審議会・第37期青森県社会教育委員の会議スケジュール 12 【参考2】諮問書

1 開 会

(内容省略)

2 案 件

会長 それでは、次第に従い進めます。まず案件の1つ目、令和6年度生涯学習・社会教育総合調査研究について、事務局から説明をお願いします。

(事務局から「資料1－1～2」説明)

会長 私からこの考察の部分について説明します。今回の調査には、八戸学院大学の井上丹先生と一緒に携わりました。調査結果に対する井上先生と私の考察は、報告書の後半部分に掲載されていますのでぜひご覧ください。今は、資料1－1の「8考察」の部分をご覧くださいながら、少し補足的な話をします。

まず、井上先生の考察で非常に示唆的だと感じたのは、地域のことが「好き」という人と「どちらかと言えば好き」という人とでは、地域に対する意識や行動に大きな差が出ているという指摘です。

問11「地域への愛着度」と問15「住んでいる地域に対する意識」、また、問11「地域への愛着度」と問16「住んでいる地域での行動」をそれぞれクロス集計した結果、例えば、地域のことを友人・知人に「自慢できる」と回答した人は、「地域が好き」な層では65%に上るのに対し、「どちらかと言えば好き」な層では33.3%と30%以上の開きがあることが見えてきました。また、「地域の風景や自然、お店、催し物などをSNSに投稿する」という行動については、「地域が好き」と回答した人は62.7%に上るのに対し、「どちらかと言えば好き」という人は31.4%と、やはりこの項目でも30%以上の差が見られました。そして、「地域の祭りやイベントに参加したい」という意識を持つ人は、「地域が好き」な層では60%でしたが、「どちらかと言えば好き」な層では33.7%と、3割には満たないものの2割以上の差がありました。「町会・自治会など地域の役に立つ活動に参加したい」という人は、「地域が好き」な層では59%に上るのに対し、「どちらかと言えば好き」な層では35.2%に留まっています。このように、「好き」と「どちらかと言えば好き」というのは、一見すると微妙なニュアンスの違いと捉えられがちですが、実は地域に対する意識や行動においては、かなり大きな差として現れていることが見えてきます。

このことから、井上先生は、青森県として「どちらかと言えば好き」という層ではなく、本当に「心から好きと言える人」の割合を増やしていくことが重要なのではないかと指摘されていました。また、「好き」と「どちらかと言えば好き」を合わせると9割弱に上りますが、逆に「どちらかと言えば好きではない」「好きではない」と回答した1割強の方々は、地域に対する意識や行動についてもかなり後ろ向きな回答結果となっていて、二極化状態にあるということが考察で示されていました。こうし

た二極化状態を踏まえ、「地域に対する意識が高い層」と「そうではない層」というようにターゲットを絞った対策が必要なのではないかということも提起されていました。例えば、意識が低い層に対しては意識が高い層との会話や交流の機会を増やすこと、意識が高い層に対しては地域のことについて SNS 等でより積極的に発信してもらえるような仕掛けづくりをすることが有効なのではないか、という具体的な提案も示しています。

次に、私の考察について述べます。

ここでは、地域への愛着を持つようになった契機と、地域への愛着を醸成するために県民が県の教育委員会にどのようなことを期待しているのか、という2点について話します。

まず、愛着を持つようになった契機についてです。問10では、例えば地域の自然や食など地域の様々なもの・ことに対し、どのようなときに気に入ったり、大事にしたいと思ったりするかを尋ねました。回答割合が圧倒的に高かったのは、「自分自身が見たり、体験したりしたとき」で70%を超えていました。これは、テレビやインターネットで取り上げられたときや、県外の方にほめられたときという回答よりも圧倒的に高い割合です。この結果は、地域への愛着や誇りを育む上で、メディアなどを通じた間接的な情報や他者からの評価よりも、自然、文化、祭り、食といった地域の豊かな事物に直接触れ、体験・体感する機会を創出することが重要であることを示唆していると感じました。

次に、問13では、地域への愛着を持つようになった理由を尋ねています。結果は「住み慣れているから」が最も高く52.1%、次いで「育った地域だから」が30.3%でした。生まれ育ち、長く暮らしてきた土地だからということが、自身のアイデンティティとも関わり、当然かもしれませんが、地域への愛着を感じる主要な要因になっていると考えています。

一方、特に注目されるのは、「学校でこの地域の良さを学んできたから」という理由です。この理由を挙げた方は、40歳以上では1~2%とごく少数でしたが、20歳~29歳では12.2%、30歳~39歳の世代では9.3%と1割程度ですが一定の割合を示していることが見えてきました。このことは、学校での特別活動や2000年に新設された総合的な学習の時間（高校では総合的な探究の時間）、「あおもり創造学」といった取り組みを通じて、学校で多様に実践されてきた地域学習の成果が、一定程度このように現れていると見ることはできるのではないかと考えました。逆に言えば、学校での地域学習をさらに充実・発展させることで、地域への愛着を醸成でき、それが重要な契機になるとも言えるのではないかと考えています。こうした点からも、地域と学校がさらに連携・協働を深めながら、豊かな地域学習の機会を創出していくことが重要な手立てとなるのではないかと考えています。また、この設問では、「こどもの頃から地域の祭りや行事に参加してきたから」という理由を挙げた人も25%ほどいて、特に20歳~39歳では約3割がこの理由を挙げており、「住み慣れているから」に次いで2番目に高い理由となっていました。このように、特に若い世代にとっては、地域の祭りや行事に参加するという直接的な体験が、地域への愛着を形成する上で重要な契機となっていると言えるでしょう。一方で現状を見ると、地域の祭りや行

事は担い手不足がしばしば指摘されます。高齢化や担い手不足が課題となり、特にコロナ禍を経て、その維持や継続が難しくなっている実態もあります。そうした中で、これらを持続可能なものにしていくための手立てを講じることも、地域への愛着や誇りを育む上での基礎的な取り組みとなるのではないかと考えました。

次に、問 19 では、地域への愛着を醸成していくために、県民が県教育委員会にどのようなことを期待しているのかを尋ねました。この質問に対しては、「地域を知る学習の充実」を挙げる人の割合が最も高く 60.9%に上りました。「地域を知る学習の充実」は、回答者の世代や居住地域を問わず、どの属性においても最も多く挙げられた項目です。地域への愛着や誇りを醸成する上で、地域学習の充実が鍵となり、それを県教育委員会にも期待したいということが、県民の多くの方々の願い、あるいは期待ではないかと考えています。この結果を受け、「地域を知る学習活動の充実」に向けていくつかの提案をしました。1 つ目は、学校教育、すなわち子どもたちへのアプローチに留まらず、大人へのアプローチも含め、学校教育と社会教育（社会教育には家庭教育への支援・サポートも含まれます）の両面から地域学習を充実させることが、まず重要になるだろうということです。2 つ目は、多様な視点から地域の姿を捉える地域学習の機会が重要なのではないかとということです。地域学習や地域を知る学びというと、地域の優れた部分や豊かな部分、ポジティブな側面に目を向けがちな印象があります。それだけでなく、例えば産業、福祉、行財政、人口動態など様々な視点から、地域が今直面している厳しい現実とも向き合い、地域の課題が何であるかを科学的に捉えるような「地域を知る学び」も必要になるのではないかとということです。特に子どもたちというよりも、主権者たる私たち大人に求められる地域学習ではないかと考えていて、こうした学習を土台としながら、地域課題の解決に向けた学びや実践につなげていくことも重要になってくるのではないかと思います。難しいことではありますが、こういった地域課題解決の学びを粘り強く重ねていく中で、「地域みんなの幸せを、地域みんなでつくり出していく」という住民の自治力が高まっていくようなことにも結び付いていくのではないかと考えています。学校教育・社会教育の両面から「地域を知る学び」を展開していくためには、学校運営協議会や地域学校協働本部といった地域と学校の協働の仕組みを軸に、地域学校協働活動というかたちで地域学習の機会を豊かにすることが重要になると考えています。もう 1 点は、今回の審議事項にも関わってきますが、公民館をはじめとする社会教育施設が、地域学習の組織化や支援にきちんと対応していけるように基盤を強化していく、いわば足腰を鍛えていくことが同時に重要になるのではないかと考えています。

今回の調査結果を受け、井上先生と私が行った考察の内容を簡単に紹介しました。事務局からの説明並びに私からの補足説明を踏まえ、委員の皆様からご感想でもご質問でも結構ですのでご発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。特にこの点が印象に残った、あるいはこの点について疑問がある、といったことでも構いません。

委員 これほど手厚く研究調査をしていただいたデータは、非常に素晴らしいと感じました。また、考察も諮問事項を検討する上で非常に重要な視点を含んでいると感じま

す。やはり世代間別の考察は非常に重要だと感じました。資料では、全体の母集団に対する回答が中心でしたが、詳細な報告書を見ると、例えば近所付き合いや地域の大人とのつながりについて、20代の回答が際立って少ない点が気になりました。考察の「地域全体でこどもを育む活動の充実を図るためにも、地域住民同士のつながりづくりは不可欠である」という点は、まさにその通りだと感じました。その上で、こども主体のイベントを実施する際に懸念されるのは、世代間の断絶です。大人がこども向けにイベントを用意すると、こどもたちだけの活動になりがちです。そうではなく、地域全体のイベントの中でこどもに主体的な役割を与えるなど、大人とのチャネルを持てるような仕組みづくりが必要なのではないかと感じました。

会長 大人が様々なものを用意してこどもを単なる参加者として扱うのではなく、こどもたちがどのように地域の行事や様々な活動に主体的に参画していけるかという点が、大人とのつながりを築く上で非常に重要だと感じました。

委員 先日、外ヶ浜町で「外ヶ浜が好きですか」というアンケートを実施したことを思い出しました。人口約5000人の町で480件の回答があり、「1から10のうちどのくらい好きですか」という質問に対し、「10」と回答した人が最も多かったです。高齢者が多い背景もあるかもしれませんが、「8」「9」「10」を合わせると過半数の方が「好き」と回答し非常に嬉しい驚きでした。「何が好きですか」と尋ねると、高齢になるほど「周りの人が良い」と答え、「いつも助けられて生きているから」「こんなに助けてくれる人に恵まれているのはこの地域だからだ」と感じている方が多いようでした。具体的な例では、「大雪で家から出られないかもしれない」と思った朝、近所の方が玄関までの雪かきをしてくれていた、という話がありました。そうした助け合いがあるからこそ、夏に娘さんから贈り物が届いたら近所にお裾分けするなど、行為の良い循環が生まれ、お隣さんやご近所さんに助けられて生きていることへの感謝が、この地域の良さだと感じているようです。

ただ、これらは主に高齢者の意見であり、若者にとっては必ずしも魅力とはならないかもしれないと感じています。若者にとっての魅力は、やはり経済的な豊かさや利便性といった物質的な側面に目が向きがちではないでしょうか。経済的な基盤を築き終えた世代にとっては非常に良い地域かもしれませんが、日々の生活に追われているうちは、そうした心の豊かさには気づきにくいのかもと考えています。

少し実情を話しますと、役場職員の中には、青森市に居住する人も少なくありません。理由を尋ねると、役場職員であるがゆえに地域で模範となることを期待され、地区の役員に選ばれたり、会計を任されたり、どぶ掃除などを率先して行うよう求められたりすることが負担になっているようです。例えば、ご主人が役場職員の場合、本人はそれを受け入れていても、奥様が「役場職員の奥さんなのに、あまり地域活動に参加していない」などと言われることを嫌がり、「青森市なら誰も私のことを知らないから」と町外に住んでしまうケースもあると聞いています。そうした状況の中で、こどもたちに地域の良さをどのように伝えれば良いのか、非常に難しい課題だと感じています。学校では地域の良さを熱心に教えてくださり、地域の方々も非常に優しい

のですが、それだけでは十分ではないのかもしれませんが。何か良いアイデアがあればと願っています。

会長 もし可能でしたら、外ヶ浜町で実施された調査の結果を、可能な範囲でご紹介あるいはご開示いただけると大変嬉しく思います。今回の調査でも、40代、50代の方々の「地域が好き」という割合が他の世代に比べて低下している結果でした。この世代は働き盛りであり、親の介護なども現実的な問題として意識し始める時期でもあります。この世代で「好き」の割合が減少する理由について改めて考えさせられましたが、世代によってどのような違いが現れるのかを丁寧に捉えなければ、全体の数値だけでは実態を正確に把握することは難しいのではないかと感じました。

委員 現在の40代が地域への愛着を感じにくいというのは、おそらく青森県に限らず日本全国共通の傾向かもしれません。私たちは就職氷河期世代であり、国に見捨てられたという思いを抱えている部分があるのではないのでしょうか。私自身もまさにその世代ですが、私たちが新卒だった頃は団塊の世代が多く、採用枠が少なかったという経験があります。あれだけ受験勉強をがんばったにもかかわらず、地元でも都会でもなかなか受け入れてもらえなかったという思いが、根底にあるような気がします。

委員 調査報告書の先生方の考察は、ごもっともだと感じながら読ませていただきました。私は、諮問書の「公民館等の社会教育施設におけるこどもたちの継続的な地域学習の推進」という点が特に印象に残っています。現在教育委員会にて、公民館も所管していますが、公民館での活動について「公民館等が主催する教養やスポーツに関する学習活動に参加したことがある」という項目で、「当てはまらない」と回答した人が50%を超えています。私の町でも高齢化が進み、公民館活動が縮小傾向にあるのが現状です。現在、県教育委員会に期待することとして「地域を知る学習を充実させてほしい」という意見が高いとのことですが、こどもたちだけでなく、親世代、特に40代の方々にも公民館に足を運んでもらうための工夫、こどもたちとそうした世代と一緒に引き込むような取り組みについて、何か示唆を得られるような調査や情報があればと思いました。世代で区切るのではなく、様々な世代の人々が、公民館をはじめとする社会教育施設へ足を運んでももらえるようなヒントがほしいと願っています。

私の町では人口減少が進んでいて、社会教育施設も老朽化などの問題から、いずれは閉鎖せざるを得ない状況も考えられます。プールや体育館などもありますが、少しでも町民の方々に足を運んでもらうことが非常に難しくなっています。町外、特に近隣の市で様々なイベントが開催されると、町民はそちらに流れてしまいます。町内に留まってもらうための何かが必要です。例えば、先日野辺地町でお祭りがありましたが、三沢市のお祭りと同じ日だったため、参加者が少なかったと聞きました。私自身は多くの町民で賑わっていると感じたのですが、「いつもより少ない」とのことでした。これが現実かと痛感し、町民が町外へ流出せず、町内に留まってくれるような取り組みができないものかと強く感じています。

会長 発言いただいた内容は、審議事項 1 に関わる重要なご指摘かと思います。本日すぐに解決策や妙案が出るわけではありませんが、我々第 17 期審議会として何らかの方向性をきちんと示せるよう、議論を深め内容を充実させていきたいと改めて感じました。

委員 近年、非常に多くの取り組みがなされ、おそらく 10 年前、20 年前と比較して、現在では青森県が好きだ、誇りに思っているという県民が大幅に増えたのだと思います。これは関係者の皆様、私たち自身の努力の賜物だと考えますが、もし次の段階に進むのであれば、やはり課題となるのは問 15「地域の役に立つ活動や地域づくり活動に参加したい」という項目で、肯定的な意見が少なかった点です。考察でも述べられていましたが、結局は「地域全体の幸せを地域全体でつくり出す」という当事者意識が重要になると考えます。おもしろいイベントがあるから参加する、良い祭りがあるから行く、といった受け身の姿勢で地域を知るのではなく、次の段階としては、自分たちで汗をかき何かをつくり出すという活動を推進していくべきではないでしょうか。「好き」という感情だけが増えることが必ずしも良いとは考えておらず、たとえ「嫌い」な部分があったとしても、自分たちが主体的に関わっていく地域というような関係性が築ければ良いと考えています。例えば高校生も、おもしろいイベントに参加したりボランティアに行ったりするだけでなく、自分たちでボランティア活動を企画・実行するようなことができれば良いのではないかと考えていました。

会長 まさに主体性という点が重要になってくると思います。何か一步踏み出すきっかけづくりが今回の答申においても鍵となるような気がしました。

委員 私は 40 代で青森を愛しているつもりですが、なかなか行動として成果が出ていないと感じています。子育て中で様々な団体に所属しているため、新たにイベントを立ち上げるような時間を確保することが難しいのが実情です。すでに土日も平日も予定がいくつも重なっている状況で、何か新しいことを始めたいと思ってもなかなか難しいと感じています。他のイベントなどを見ていると思うのですが、例えばお祭りが始まると、三沢市も特にそうですが「こんなに人がいたのか」と思うほど、県外からも県内からも多くの方が集まります。「練習から参加したかった」という声も聞かれるほどで、「本当に移住してくれれば良いのに」という話が出るくらいお祭りなどのイベントは貴重な機会です。しかし、そうしたイベントだけに特化してしまうと、その地域に住み続けるという意識には、つながりにくいのではないかと感じています。

公民館についても常々思うのですが、三沢市内に非常に活気のある公民館があり、様々な団体が習い事、バレエ、将棋、麻雀などを行い、多様な世代が集っています。その一方で、町内会長さんが鍵を管理していて、お願いしないと開けてもらえないような公民館もあります。もっと空いているスペースや活用できる場所を地域住民が自由に使えるようになれば良いのにといつも感じています。そうした取組を通じて、子どもたちが自由に勉強できるスペースができたり、OB の先生方が教えに来てくれた

りするような場が生まれればと思います。最近、学校運営協議会などでも、町内会が主体となってバーベキューなどのイベントを開催し、地域住民が集まっているという話を聞きます。そうした小さな取り組みが積み重なっていくことで、もっと魅力的な公民館になっていくのではないかと考えています。

会長 県の生涯学習・社会教育総合調査研究事業は、本審議会の議論と連動させながら、その基礎資料となるデータを収集しています。それを踏まえ、今年度どのような調査を実施すべきかという点について、ご意見をいただきたいと思います。いかがでしょうか。「ふるさと青森を愛する心」を育むための手立てを考える上で、3つの審議事項がありますが、審議事項1の「公民館等の社会教育施設で何ができるのか」という点にも焦点が当たっています。この点に関して、どのような調査を行えば有効なデータや情報が得られるか、ご意見をいただければと思います。

委員 地域に対する「好き」と「どちらかと言えば好き」の間には、大きな違いがあるという点が非常に気になりました。この違いはどこから生じるのだろうかと考えていました。「地域学習の充実」という話がありましたが、そもそも「地域」とは何なのでしょう。食文化、歴史、産業、祭りなどがありますが、お祭りを除いた食、文化、歴史、産業などに対して「好きか嫌いか」と問われると、「どちらかと言えば好きかな」という回答になりがちなのではないかと感じます。例えば三沢市でホッキ丼が提供されているというニュースを見ても、「ホッキ丼、美味しそうだな」と思う程度ですが、三沢市にお住まいの方から「三沢のホッキ丼は美味しいですよ。特にあのお店が一番です」というように人を通じて勧められると、「行ってみようかな」という気持ちになります。つまり、食文化そのものに加えて、あるいはそれ以上に「人」が重要なのではないかと考えています。そこに住む人を通じて、その地域の食や文化、歴史などを知り、愛着を深めていくのではないのでしょうか。そう考えると、やはり「体験」が重要な意味を持つてくると感じました。体験を通して地域の人々を知り、「どちらかと言えば好き」から「本当に好き」へと気持ちが変わっていけば良いなと思っています。

学校教育の中で地域学習を充実させるという話もありましたが、学校での地域学習を先生方が行うよりも、地域の方々が学校に入って授業を進めた方が、こどもたちの地域への思いが「どちらかと言えば好き」から「好き」へと変化しやすいのではないかと感じます。それはやはり「人」を介するからではないのでしょうか。「人の役に立つ」「地域の役に立つ」ということも、人を知ることによって役に立つ行為自体が喜びに変わっていくのではないかと考えました。こうしたことも念頭に置きながら、今後の調査テーマを考えていければ良いなと思っています。

会長 地域のもの・ことに触れる際には、人を介して触れたり知ったりすることが重要な意味を持つということを感じました。今年度どのような調査を実施すべきかという点について、何かご意見、ご提案はありますか。

委員 生涯学習審議会の委員を務めるのは3期目になりますが、審議事項の3つ目にある「地域に根付いた持続可能な取り組みにするための仕組みづくり」というテーマは、毎回のように出てきているように感じます。資料1－2のこれまでの調査研究を見ても、どちらかという県民や受益者側、つまりサービスを受ける側の調査が多いように思います。一方で、仕組みを構築している側や運営している側、例えば行政やNPOなどが連携して教育事業を展開する際の提供者側の視点からの調査があまり行われていないように感じました。提供者側が抱える課題や今後取り組んでみたいことなど、仕組みを提供する側の実態を把握する調査を実施すべきではないかと強く感じました。

会長 今回の諮問では、社会教育施設はもちろん、その設置者である社会教育行政、さらにはNPOなども関わってくると考えられますので、提供者側の視点に立った調査が必要ではないかという意見です。

委員 これまでの活用実績を見て、どれも素晴らしい内容が書かれていますが、その後の具体的な進展や成果について知りたいと感じました。令和2年度の家庭教育支援の充実に関する審議会にも委員として参加しましたが、その後の状況が気になります。また、最近、講座などで学校に伺うと、保護者の方々、特にお母様方を見ていると、その親世代である祖父母とのつながりなどが希薄になっているのではないかと感じる場合があります。そうした状況からも、「ふるさと青森を愛する心」を育む上では、ソフト面、特に人との関わり方が重要になると感じました。例えば、こどもを褒めることや「ありがとう」といった感謝の言葉を伝える機会が減っているように思います。親御さんたちも多忙で、働き方も多様化し、こどもと向き合う時間やコミュニケーションが不足しがちになっているのかもしれませんが。どのような取組においても、それを動かす「人」や「人との関わり」が基本となるので、そのためのコミュニケーション能力や、そうした人材を育てるための手段が必要なのではないかと感じています。

会長 調査を実施しただけで終わらせない、その後のフォローアップが重要であるという点は改めて認識しました。また、人と人との関わりの重要性も改めて感じました。その他、調査に関して、今年度実施すべき内容についてご提案やご意見はありますか。

委員 現在の調査では「好き」「好きではない」「そう思う」「あまりそう思わない」といった表面的な回答は把握できますが、「そう思わない理由」について具体的に尋ねている調査はありますか。例えば、「なぜ公民館を利用しないのか」といった点です。本当に公民館の利用を促進したいのであれば、なぜ公民館に足が向かないのか、その理由を深掘りする必要があると思います。広報が不足している、場所が分かりにくい、開館時間が不明、施設が古いなど、様々な理由が考えられます。ネガティブな意見の背景を具体的に聞くことで、その課題を一つ一つ解決していくことができるのではないかと考えています。

会長 公民館等の社会教育施設について、利用していない方々がたくさんいる中で、その方々が「なぜ利用しないのか」という理由に焦点を当てた調査も重要ではないか、というご指摘です。

この場で結論を出すということではなく、様々なご提案をいただければと思います。

委員 資料１－２の活用実績を見ていると、私が委員になってからこれまで、調査が毎回行われていますが、結局のところ「つながり」や「人づくり」といったテーマが、名称を変えながら繰り返されているような印象を受けています。今後の実地調査を経て報告書をまとめる上で、過去の調査結果がどのように成果に結びつき、状況がどう変化してきたのか、といった検証の視点が必要なのではないかと感じます。ただし、今回新たな調査結果が出たので、これを活用していく必要があります。特にポイントだと感じたのは、資料１－１で要約されている問１２「地域への愛着を持った時期」、問１３「地域への愛着を持った理由」です。強く思うのは、いかにこどもの頃にそうした教育や仕掛けを施していくかという点です。私たちの世代（５０代後半）は、自然なつながりの中で愛着や郷土愛、ふるさと愛といったものが育まれてきたように感じますが、現代においては何らかの意図的な仕掛けが必要だと感じています。調査結果でも、２０代が愛着を持った時期として「小学生の頃」「高校生の頃」を挙げる割合が高く、また「学校で地域の良さを教わってきたから」という理由も一定数見られることから、やはり「ふるさと教育」が一つの重要なポイントであり、こどもの頃の教育にどのように働きかけていくかが鍵となるのではないかと感じています。そうした仕掛けを行っている組織のキーパーソンがどのような戦略を持っているのか、といった点も調査項目として深掘りしてみたいと感じました。

高校時代の同級生が小学校の校長先生をしていて、私の本職であるファイナンシャルプランニングの知識を活かして金融教育やお小遣いの話などをできないかということがきっかけで、様々な話題に派生しました。その中で、地域に住み働いている人々の職業や仕事内容、あるいは「この人のようになりたい」ということを地域学習に組み合わせてみてはどうかという話になりました。地域には多様な人材がいるはずで、地域づくり協議会もあるので、もっと多くの人々をつないでいく必要があるのではないかと感じました。現状では、地域の中で誰がどのような仕事をし、どのような思いで活動しているのかを知る機会が不足していると感じます。そうした点を踏まえ、教育分野だけでなく、地域づくり団体やNPOなども含め、どのような戦略で活動しているのかを把握することが、非常に重要なポイントになるのではないかと考えています。

会長 教育分野だけに限定せず、地域づくりに取り組んでいる様々な団体や機関を対象とすることで、有効な知見が得られるのではないかとというご提案です。

今回の諮問は、３つの審議事項で構成されており、審議事項１を基礎として審議事項２を、そして審議事項１及び２を基礎として審議事項３を議論するという構成にな

っています。そのため、まずは審議事項1にしっかりと焦点を当てて議論を進めることが重要になると考えています。その観点から、あくまで個人的な意見ですが、例えば県内の公民館に限らず、図書館や博物館なども含む社会教育施設を対象とし、こどもたちの地域学習がどのように進められているのか、その実態や成果、課題などを把握する調査が必要だと感じています。また、こどもたちの地域学習に関連して、地域の学校やこども会などの団体とどのような連携が図られているのか、という情報を収集することも、審議を進める上で重要な資料となるのではないかと考えています。

今日で今年度の調査内容を決定するわけではありませんので、委員の皆様からいただいた様々な意見を踏まえ、改めて事務局にてご検討いただければと思います。また、他にも必要な調査などがありましたら、本日の会議中に改めて皆様にお聞きできればと思いますので、休憩時間などに何かお気づきの点があればご発言いただければと思いますし、会議終了後でも結構ですので事務局へご連絡いただければ、検討の材料とさせていただきますと思います。

案件（1）についてはここまでとし、休憩をはさみたいと思います。

（休憩）

会長 それでは、案件（2）に移ります。実地調査について、事務局から説明をお願いします。

（事務局から「資料2－1～5」について説明）

会長 今回は、実地調査先と調査内容の2点について、皆様からご意見をいただきたいと思います。まず、実地調査先について、何か追加したい施設や団体などがありましたら、提案をお願いします。

委員 実地調査の候補先3についてですが、今年度は女性育成事業を実施しないことになったそうです。ただ、可能であれば、中学生に対する避難所運営訓練を視察対象として変更していただくことはできないかと考えています。主な取組としては、生徒、教員、地域の方々を対象とした避難所運営訓練で、安心・安全な避難所運営について学習します。具体的には、地域にどのような方々が住んでいるかを把握し、地域の方々と一緒に避難所をモデルルームのように実際に設営します。また、地域には要配慮者がいることを想定し、その方々の役を体験するといったことも行います。この取組をぜひ視察していただきたいと考えています。ただ、調査期間は7月下旬までとなっていますが、私がお勧めしたいのは、9月3日に階上町の道仏中学校の生徒たちが道仏交流館で地域の方々と共に実施する避難所運営訓練です。この訓練であれば、審議事項1から3のすべてに該当するのでぜひ見ていただきたいですが、9月では難しいでしょうか。

事務局 9月には第4回審議会が予定されていますが、11月予定の社会教育委員の第2回会議に調査結果を報告・分析するということも可能ですので、時期については柔軟に対応し、進めていければと考えています。

委員 もし変更が可能であれば、そのように変更し、候補先に加えていただきたいと思います。

会長 実地調査先候補を、中学生を対象とした地域の指導者が関わる避難所運営訓練の取組に変更する、ということです。実施日が9月ですが、それに合わせて調査を実施することも柔軟に対応するとのことです。
他に何か追加のご提案等ありますか。

委員 先ほど三沢市内に非常に活発に活動している公民館と、そうでない公民館があるという話がありました。もし可能であれば、その活発に活動している公民館を候補先に加えてはどうですか。

委員 今回の調査の趣旨にそぐうかどうか少し気になったため、先ほどは具体名を控えましたが、三沢市の古間木地区にある施設です。ただ、特定のイベントを見に行くという形での視察には向かないかもしれません。

委員 実地調査は、特定の活動を見に行くだけではないと理解しています。どのような連携体制をとっているのか、どのような広報活動を行っているのか、という運営面について、「公民館にどのように人を呼び込むか」という点に非常に関心があり、知りたいと思っています。そのため、活発な公民館は調査対象として合致するのではないかと考えています。

委員 その施設の玄関に活動スケジュールが掲示されているのですが、いつも予定がびっしりと埋まっています。すべての団体がどのような活動をしているかまでは把握していませんが、非常に活発に運営されているという印象です。

会長 可能でしたら、もう少し詳細な情報を収集していただき、その公民館またはセンターがどのように運営されているのかという点も含めて情報提供をお願いします。

私からも提案をします。1つは、今回の審議事項1に関連して、「公民館等」と記載されていますので、公民館以外の社会教育施設にも目を向けるのが良いのではないかと考えています。例えば、八戸市の八戸市立図書館や八戸ブックセンターを中心とした「本のまち八戸」の取組です。こどもたちに向けて「マイブッククーポン」として2,000円分のクーポンを配布するなど、八戸市の図書館や本を核とした地域づくりの取組に注目してもおもしろいのではないかと感じています。

団体や施設ではありませんが、個人として、弘前市相馬地区で地域おこし協力隊として活動されている穂坂修基（ほさかもとき）さんという方がいらっしゃいます。穂坂さんは元小学校教員で協力隊の道に進まれた方ですが、相馬地区で学校と地域をつ

なぐ活動に熱心に取り組んでおられます。さらに、地域の住民と共に相馬地区の歴史を掘り起こそうと「相馬凸凹（でこぼこ）学会」を立ち上げ、地域の郷土史研究活動も行っています。その活動が学校とどの程度結びついているかは分かりませんが、穂坂さんが相馬地区で取り組もうとされていることは非常に興味深く、今回の諮問事項にも深く関わってくるのではないかと考え、ご提案します。

もう一つ、博物館という観点では、現在休館中ではありますが、青森県立郷土館が移動博物館という形で学校と連携し、様々な取組をこれまで進めていると認識しています。県立郷土館の移動博物館や学校連携の取組からも、多くの知見が得られるのではないかと考え、以上3点を候補先として提案します。

調査先についてはここまでとしますが、会議終了後や後日でも結構ですので、他に興味深い場所や参考になりそうな事例がありましたら、遠慮なく事務局までご連絡ください。

次に、実地調査に関連した調査内容についてです。資料2-5の調査シート案がたたき台となりますが、この内容で良いかという点も含め、答申をまとめる上で参考になるような質問項目などがありましたら、ご意見・ご提案をいただければと思います。

委員 私自身もインタビューなどを行う際には、まず大きな骨子、つまりこのシートで言えば（1）から（10）のような項目を示しつつ、そこからさらに枝葉を広げていくという形を取ります。例えば「経緯」という項目であれば、先ほど話題に上った相馬地区の地域おこし協力隊の方のような、「人」に焦点を当てるとするのは非常に良い視点だと感じます。これまでは取組や事業、あるいは公民館関連の事例が多かったように思いますが、それらを実施している「人」、その人がどのような思いで行動しているのか、という背景やつながり、いわば「経緯」の部分をより深く掘り下げる必要があるのではないのでしょうか。また、「（7）参加者数の推移」についても、単に人数を聞くだけでなく、参加者の年代や属性など、より詳細な情報を把握する必要があると思います。大項目としては、このシートで概ね網羅されていると思いますが、さらに細かく「このポイントは必ず聞く」といった項目を、補足として括弧書きなどで加えておくと、質問する側も意識しやすくなるのではないかと感じました。

会長 実地調査は、各団体や活動の代表者、キーパーソンの方々への聞き取りが中心となりますので、そのキーパーソンがどのような思いを持ち、何を大切にしながら活動を展開しているのか、その「人」に焦点を当てて話を聞いてくる、ということと理解しました。

他に調査シートをご覧になって、何かお気づきの点はありますか。

委員 現実的な参考資料とするために、各事業の予算規模についても聞いた方が良いのではないのでしょうか。この点を把握しておかないと、将来的に他の自治体が参考にしようとした際に、どの程度の規模で実施可能なのかが分からず、活用しにくいのではな

いかと考えます。私自身、これまでの実地調査で率直に聞いたところ、意外と教えてくれることが多かったので、検討の余地はあるのではないかと思います。

会長 予算規模や財源の状況といった点も、非常に重要な視点だと思います。

私自身も、キーパーソンに焦点を当て、その方の思いをしっかりと聞き取ってくることは非常に重要だと考えています。キーパーソンの方が、子どもたちの地域への愛着や誇りを育むことについてどのように考えているのか、その考え方や視点の置き方などを具体的に聞くことができれば、多くのヒントが得られるのではないかと感じています。調査シートの項目で言えば、「経緯」などが関連してくるかと思いますが、そのような視点も加えてみてはいかがでしょうかと提案します。

委員 ここまでやると際限がなくなってしまうかもしれませんが、受益者、つまり活動に参加した人たちの声も聞くことができると感じます。仕掛けた人たちの話だけでなく、実際に参加した人たちがどのように感じ、郷土愛などがどのように育まれ、変化していったのかという点も非常に関心があります。そこまで踏み込まないと、「横展開」が難しくなるのではないのでしょうか。予算や財源といった情報と合わせて、実際にどのような効果があったのかを、仕掛け人の視点だけでなく、参加者の声もいくつか拾うことができれば、調査結果にさらに厚みが増すのではないかと感じました。

会長 「(5) 事業・取組の成果」という項目について、単に運営者側、つまり活動を実施している側のコメントを収集するだけでなく、実際に活動に参加している人たちの声などからも成果を把握できると良いのではないかと、ということでした。時間的な制約があり難しい面もあると思いますが、非常に重要な視点ではないかと感じます。

調査シート及び調査項目についてはここまでとします。今回ご提示いただいた調査シート案の10項目は、各事業や取組の概要を把握するという意味では、基本的な事項は網羅されていると思います。この基本項目にどのように枝葉を加え、活動の本質的な部分を捉えてくるかが重要になると考えます。各委員がこのシートをベースとし、実際の聞き取りの中で、この団体についてはこの点をさらに深掘りした方が興味深い、という直感的な判断も交えながら、枝葉を広げて活動の実態を把握していく、という方向で共通認識とさせていただきます。

先ほど話題に挙がりました今年度県教育委員会では実施する調査研究事業について、休憩中などに何か新しい案を思いつかれた方がいましたらお願いします。この件についても何かありましたら、会議終了後や後日でも構いませんので、事務局にご連絡いただければと思います。

少し早いですが、「その他」の案件に移りたいと思います。今後の審議会のスケジュールについて、事務局から説明をお願いします。

(事務局から「参考1」について説明)

会長 この件に関して何かご確認したい点がありますか。

委員 今後どのように動くのか、具体的にどのような形で調査に参加するのか、いつ、誰と、といった詳細がまだよく分かっていません。説明をお願いします。

事務局 本日の審議会が終了した後、実地調査先の候補一覧を示し、皆様に訪問希望先、調査可能な日時について確認するメールをお送りしますのでご回答ください。その後、皆様の希望と訪問先の都合が合うように事務局で最終調整し、実地調査先と日時を決定する、という流れになりますので、少々お時間をいただくことになります。

委員 県外の候補先もありますが、県外への調査も可能なのでしょうか。

事務局 県外への調査も可能です。希望調査の際に、県外の候補先に記入をお願いします。ただ、全員が県外を希望されると調整が必要になります。

委員 事務局で追加された公民館の候補が多数ありますが、これらはまだ候補の段階ということでしょうか。それとも既に確定していますか。

会長 確定ではありません。あくまで候補の段階で、近年優良公民館表彰を受賞した公民館の中から、今回の審議に関連しそうな施設をリストアップしていただいたものです。

委員 ここから旅費や諸経費なども考慮し、候補先を絞り込んでいくことになりますか。

会長 まずはこの候補先から皆様に希望をお聞きします。皆様が希望されるということは、その実践や取り組みが興味深いと考えたからだと思いますので、それによって自ずと優先順位が見えてくるのではないかと考えています。

委員 各委員が1、2か所程度、訪問してみたい候補先を挙げることで、ある程度絞り込みが行われるということで理解しました。

少し話が派生しますが、現在私はラジオクラブに関わっていて、地元ラジオ局と共同でゴミ拾い競技「スポ GOMI」を開催したことがありました。先ほど検索したのですが、この取組の源流は静岡県浜松市のセンターがイベントと地域住民をうまく結びつけている事例にあるようです。「スポ GOMI」自体は、それを企画・運営する一般社団法人があり、全国各地でメディアと連携して展開しているようです。おそらく調査を進める中で、こうした事例も出てくるのではないかと感じています。地元を巻き込むという視点では、かつて大鰐町で実施された、オリエンテーリングと写真を組み合わせた「フォトロゲイニング」なども、一般社団法人が企画し地域の人々を巻き込んでいました。私が過去に関わった事例にも外部団体が関与しているものがありまし

た。実地調査で話を聞く中で、このような連携のあり方も見えてくるのではないかと感じました。

会長 県外候補で挙げられている静岡県浜松市の公民館類似施設である富塚協働センターには、かつて「スーパー公務員」と称された野嶋さんという職員がいらっしゃいましたが、確か今年度から異動でセンターを離れられたと記憶しています。もし野嶋さんに話を聞けないとなると、どうしたらよいかと考えていました。

委員 もし異動されていても、元々関わっていた方なので、野嶋さんに話を聞いても良いのではないのでしょうか。何らかの形で現在も関わっていらっしゃる可能性があると思います。

会長 それぞれの団体や施設には、興味深い活動をされている職員の方がたくさんいると思いますので、そうした方々に話を聞けると良いと思います。

それでは、委員の皆様には調査先の第1希望から第3希望程度まで挙げていただき、それを事務局で集約・調整しながら優先順位を決定し、候補先を絞っていくという形で進めていきたいと思っています。私たち委員としては、今後の審議に資するような知見を得られる実地調査にしたいと考えています。

では、これをもちまして予定していました案件がすべて終了しましたので、進行を事務局にお返しします。

3 閉会

(内容省略)